魔術学園魔工科の問題児《トラブルメーカー》

冬澤雪斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔術学園魔工科の問題児（トラブルメーカー）

【Ｎコード】
Ｎ６５４６Ｙ

【作者名】
冬澤雪斗

【あらすじ】
異世界に転生した主人公を中心に様々なトラブルが。
「まじだりぃ～」
主人公に平和な日常が来る日はあるのか？！（笑）

よくある転生物&主人公チート物です。

初作品&初投稿なんで大目に見てください（^ー^；

プロローグ。（前書き）

修正しました（汗）

プロローグ。

ふと気がつくとそこは知らない部屋だった。

―は？此処は？―

そう思い体を起こそうとするがまったくゆう事をきかない。

―どう言う事だ？―

意識ははっきりしているのに言葉に乗せることが出来ない。

だんだん焦りを帯びる精神に押され口から出た言葉は

「おぎゃ～っ！おぎゃ～っ！」

―はっ？―

そう意識が戸惑いつつも泣き声は収まる気配はない。

暫く呆然としつつその状態でいると

「あらあら、目が覚めたのかしら？」

若い女性の声と共に視界に人の姿が。

そこにいたのは見た目はまだ二十歳位の女性で泣いてる俺を抱き起こしあやしだした。

ふと気がつくとそこは知らない部屋だった。

訳が判らずされるが間々になっていると近付いて来る気配とともに男の人の気配が。

「どうした？」

「いえ、坊やが起きたみたいで」

「お～よしよし。いつ見ても息子は可愛いな～♪」

「ええ。私達の子供ですもの♪」

会話からするに二人は夫婦らしい。

―…もしかしてあれか？噂の転生物？―

愕然となり自分の意識が暗闇に落ちて行くのを覚えながら、強烈な眠気に支配されてく。

眠りに就くその直前に、誰かの声が聞こえたような気がした。

―ようこそ…アストマリスへ…―

五才になりました。（前書き）

修正しましたm（　）m

五才になりました。

俺がこの世界に生まれて五年が経つ。

始めの内は色々戸惑ったが今は素直に受け入れ、この世界＜アストマリス＞に生きていく事を決めた。

この世界での名前はアストレイ・ギア・マキナ。

現在五才だ。

身長は１２０ｃｍ位、銀に近い灰色、右目は青っぽい翡翠色で左目は濃い藍色だ。

今はこの世界の文字を猛勉強中。

話す言葉に関しては（？）最初から判ったけど文字に関してはサッパリだった。

今は何とかカタコトで自分の名前を書ける位ににはなった。

次は文章にチャレンジしようと思った矢先、

…トントン…

とドアを叩く音と共に

「アストちゃ～ん♪勉強どんな感じかなぁ～♪」

やたらテンション高めの声をかけながら入って来る人が。

振り向いた先には、見た目はまだ二十歳位身長１６０ｃｍ位の金髪

に少しタレ目で右目青・左目緑のオッドアイ、
元の世界だと『スーパーモデルじゃんっ！』って言いたくなる様な美人の女性が居た。

「…母様、どうしたんですか？ご機嫌なようですが？」

そうこの人はこの世界での産みの親であり名前はアリーシャ・ギア・マキナである。

「んっふっふっ♪…じゃ～ん母特製のケーキを焼いてみました♪一緒に食べましょう♪」

「…（ハァ）判りました。」

内心溜め息を尽きながら笑顔で答える。

この母親は少しの事でも拗ねるので大変なのだ。

まあ料理はものすごく上手いので失敗とかは無いと思うけど…。

「そういえば、父様は？」

文字の勉強をしていた本を閉じ、片付けをしながら聞いてみる。

「ん～…、ダーリンは工房かしら？」

「判りました。母様とケーキ食べたら父様にも持っていきますね。」

そう笑顔で母親に告げると一緒に居間へと向かった。

▽▽▽▽
母様とケーキを食べ終え残りを家の隣にある工房まで運ぶ。
そして入口に入り奥に向かい
「父様～居ます？」

大きな声で声をかけた。

「お～少し待て！！」

そう返事が返って来たので暫しその場で待つ。

約１０分位待っていると奥から人の気配とともに男の人が出てきた。

見た目は３０才位、身長１９０ｃｍ前後の大柄で、髪の色は黒に近い藍色に深い翡翠色の瞳、
十人中八人は『絶対盗賊だろっ！』って言うくらい厳ついこの人が父親だ。
名前はヴァンガード・ギア・マキナ。

「アストか。一体どうした？」
「母様が作ったケーキを持ってきました！」

俺は笑いながらお盆を差し出す。

それを受け取りカウンターに置いた後、いきなり俺を抱き上げほお擦りしながら

「くぅ～っ！やはり俺の息子！この歳で勉強もちゃんとしてお手伝

いまで！！可愛いな～♪」
「父様！お髭痛いっ（笑）」
「おっと、すまんな。」
笑いながら言う俺の言葉に対し謝りつつ降ろしてくれた。
―この親バカぶりはどうにかならないかな…―
何時もの事ながら内心疲れつつも笑顔を崩さず辺りを見回す。
棚に飾られているのは、元の世界のゲームや漫画等でみた剣や鎧、装飾品などが飾られている。
それらは全てこの父親が作った物だ。
家は代々続く魔工職人の家で父親で八代目。
俺はその跡取りになる予定らしい。
そんなことを考えつつ父親に目線を向けると持ってきたケーキをパクついている所だった。
「…父様、後で作業見ても良いですか？」
俺の必殺、幼児の微笑み《エンジェル・スマイル》と共に父親に話しかける。
「…アスト、本当に可愛い息子だ！神様ありがとう！！」
いきなりそう言うとまた抱きしめられほお擦りされた。
「父様！痛いですっ！…それで見学しても？」

「もちろん良いぞ可愛い息子よ！ただしちゃんとアリーシャにも言っておくんだぞ？」

「判りました。」

俺を降ろし頭を撫でながら言う父親に俺も返事を返す。

そして父親が食べ終わった皿と共に、母親にその事を伝えるため、俺は家へと走って行った。

五才になりました。（後書き）

間違いを修正しました（^ー^；

工房見学！（前書き）

修正しましたm（　）m

ご指摘ありがとうございます。

工房見学！

母親から許可をもらい直ぐに父親が待つ工房に走っていく俺。

工房に着くと待っててくれた父親と共に奥の工場に向かう。

「父様、今日は何を見せてもらえますか？」

「ん～そうだな…鋳造や鍛造はこの前見たしな…仕上げはまだだったよな？」

「はい、まだ見てません。」

俺の手を引きながら父親は仕上げの工程をする作業場所へ。

俺を机近くの椅子に座らし、父親は机に向かう。

「良いかアスト、魔工職人の作った物には力が宿る。そこまでは知っているよな？」

父親の言葉に頷く俺。

「よしよし。じゃあどうやって力を宿すかと言うと…まず最初は鍛造や鋳造の時だ。

それぞれの工程の時職人は自分の持つ最大の魔力を注ぎ鍛える。」

そう言いながら父親は鍛造し終わった剣を机の上に置く。

「アスト、この鍛え終わった品物に魔力が宿ってるのは『観て』わかるな？」

父親の言葉に頷く俺。

父曰く、代々続く魔工職人の家系、その長男は魔力を観る目を持って生まれるらしい。
そしてその魔力を観る力によって、品物に宿る魔力を好きなように加工する事が出来るらしい。

「今机の上にある剣は魔力はあるが効果は特に無い。だがこうすると…」

そう言いながら父親は剣に細工を施していく。

「とまぁ、魔力の塊をどういった物へと変えて行くかはこの細工である程度決まる。」

そう言いつつ見せてもらった剣はさっき迄とは雰囲気が違う。

「アスト、この剣の効果が何か判るか？」
「んと…持ち主に対する力と速さの加護？」

父親の問題に答える俺。
「そうだな。持つ者の筋力と速力を上げる。よく判ったな。」

俺の頭を撫でながら父親は誉めてくれた。

「普通は『観た』だけじゃ判らないの？」

頭を撫でられつつ聞くと効果が判るのは作った職人本人か鑑定の魔術を使える人だけで、俺の様にただ『観た』だけで品物の効果が判る人はまず居ないらしい。

「アストは凄い才能を持っているかもな。でも人前でその事を言わないように。」
「なんでですか？」

父親の注意に首を傾げながら聞くと、その力を狙って誘拐されるかもと言われた。

「まあ、うちのアストに手を出そうとする奴は俺が切り刻むけどな♪」

笑顔で物騒な事を言う父親に引きつった笑いを浮かべる。

父親の仕事を側で見つつ色々質問していたら夕方になっていたらしい。

母親が呼びに来て今日の作業は終わり三人で家に帰る。

そして、その日の夕食の時にも同じ様な会話を両親が話しているのを聞きつつ、自分の持つ力の事に頭を悩ますのだった。

工房見学！（後書き）

次はもう少し見直ししなきゃ（汗）

八才になった。（前書き）

誤字・脱字等有りましたらご指摘よろしくお願いいたしますm（＿）m

八才になった。

あれから三年が過ぎ現在八才。

背も少し伸び１３０ｃｍ位になった。

去年辺りから父親の仕事を手伝いつつ店先で勉強中。

この世界＜ステラマリス＞は三つの大陸と一つの群島で出来ている。

俺が住んでいるのは南の大陸＜フォルトヤード＞にある小国デルジアの王都。

名前はそのままデルジアだ。

小国ながらこの大陸有数の魔術学園がある事で有名らしい。

この世界の文化レベルは前の世界で中世に近い物がある。

違うのは《魔術》と呼ばれる物があり、この世界の住人なら大なり小なり使えるらしい。

後、ゲームや小説に出てくるような魔物や亜人も居るらしいがまだ見たこと無い。

ー亜人には早く会ってみたいかもー

そんなことを考えつつ勉強をしていると、店の扉が開く音がした。

「いらっしゃいませ～。」

そう声を掛けながらそちらに目を向けると、俺と同じ位の歳の男の子と女の子の二人。

「なんだライとミアか～。」

「なんだはないだろっ！せっかく遊びに誘いに来たのにっ！」

俺の呟きに食ってかかってきた方がライ。

名前はライハルト・デルジア。

この国の末の王子様である。

身長は俺と大して変わらず１３０ｃｍ位で炎の様な赤毛にワインレッドの瞳。

顔は…所謂イケメン君だ。

一昨年街の祭りに参加した時、何故かお忍びで来て迷子になっていたライと仲良くなり今にいたる。

「アスト、遊びに行きましょ？」

そう声を掛けてきたもう一人の方はミーアル・フェルシア。

俺の幼なじみの女の子。

身長は俺より少し高く茶色の長い髪にエメラルド色の瞳。

大人からは『人形みたいで可愛い！』と大絶賛されるくらい美人だが性格は男勝りで怒ると恐い。

「ライ落ちついて…、ミア遊びに行くって何処に？」

俺はライを宥めながらミアに聞く。

「ライが面白い所に連れて行ってくれるって。」

「おう。だからアスト！早くしないと置いていくぞ？」

ミアとライが口々に言う。

「ちょっと待ってて、父様に聞いてくるから。」
俺は二人にそう言ってから父親に許可をもらい三人で工房を後にした。

街の大通りに出てからライに向かう場所を聞くと、
「着くまで秘密だ！」
と言い切られミアと顔を見合わせた。
しばらく進み着いた場所は、街の中心に近い所にある大きな建物。
「なぁライ。此処ってもしかして…」
「そうだ！我が国が誇るデルジア魔術学園だ！」
そう胸を張るライに呆れた視線を投げかける俺とミア。
「ライ？それは判ってるけど、私たちはまだ入学してないし入れないわよ？」
「そうだよ。それに勝手に入ったらやばいよね？」
俺とミアがそう言うと
「大丈夫！父上に頼んで今日見学させてもらえるようになってるし！」

そうライは言い放ち勝手に門を潜る。
俺とミアは慌てライの後を追うと学園の入口辺りで警備の人に止められた。
「こらっ！此処は子供が来る所じゃないぞ！」
警備の人にそう言われ俺とミアがオロオロして居るとライは、
「許可は取ってある！」
そう言い放ち警備の人に何かを見せていた。
それを見た警備の人は冷や汗をかきはじめたかと思うと、いきなり敬礼をし
「しっ、失礼致しました！どうぞお通り下さいっ！」
そう言い固まっている。
「判ればいい。ほら、二人とも固まって居ないで行くぞ！」
ライはそう言い放ち先に進んでいく。
「ちょっ…ちょっとまってよ！」
我に戻ってミアと二人、ライの後を追いかけた。
追いつきライにさっき何を見せたのか聞くと、
「ああ、父上直々に貰った許可証だよ」

と笑いながら答えるライ。

―流石、この国の王子…凄いな～…―

目の前を歩くライを見ながらそんな事を思っていると、目的の場所に着いたらしくライとミアが立ち止まる。

俺も慌てて二人の側に行くと

「さて、二人を連れて来たかったのは此処なんだ。」

ライがそう言いながら開けた場所は、扉の上に魔術訓練室と書かれている部屋だった。

三人で中に入るとそこは訓練中らしい学生３０名と指導員らしい大人二人、更にそれを見ている老人が一人居た。

その場に居た学生や指導員達はいきなり現れた子供三人（俺達）を見て驚いていたが、ライは気にせず老人の元に近寄っていく。

俺とミアもライに着いて行き老人の前に行く。

そうしている時、我に返った指導員の一人がこちらに近付き

「君達っ！何処から来たんだ？此処は危ないから今すぐ出て行きなさいっ！」

そう叫ぶがライは気にせずに居ると老人が指導員に話しかける。

「かまわんよ。この子達はワシが呼んだんだ。」

「しかしっ…」

何か言いかけた指導員に対し近付き話し込む老人。
俺とミアはそれを見てライに小声で聞く。
「なぁ、あのお爺さんだれ？」
「ああ、この学園の学園長だよ。」
「「…はぁっ？！」」
俺とミアの驚きの声が重なった。
ライはそんな俺達の驚いた様子に満足したらしく
「今日は二人を学園長に紹介したくってな！」
あっけらかんと笑いながら言うライを見て俺とミアは呆れ顔になる。
この王子、思い付きで俺とミアを連れ周り驚かすのが趣味らしい。
「ライ、毎回毎回私を巻き込まないでよ…」
「そう言うなミア。俺は二人共に色々見て知ってもらいたいだけだ！」
ミアの言葉に慌てて取り繕うライ。
そこに指導員と話し終わった学園長がやってきた。
「お久しぶりです。ライハルト様。」
「ああ、学園長も元気そうで何よりだ。」
「所で今日は紹介したい者が居ると聞きましたが？」
学園長がそう言いながらこちらを見てくる。
「この二人を紹介したくってな。アストレイ・ギア・マキナとミー

アル・フェルシアだ」

ライの言葉に俺とミアは慌ててお辞儀をする。

「…ギア・マキナと言えば確かこの街一番と言われる魔工士の名でしたな」

「アストはそこの一人息子さ。」

「そちらのお嬢さんのフェルシアと言う名は確か……」

「流石、デルジア魔術学園学園長殿、判るか？」

「…ええ、フェルシアと言えばこの国の騎士団長の名と同じですからな。」

ライと学園長の話しについていけず顔を見合わす俺とミア。

「…ねぇ、アスト…」

「…ん？」

「私達…どうすれば良いのかな？」

「…わかんない…」

そんな俺達を置いて話し込むライを見ながら途方に暮れるしかなかった。

しかし、このあと大変な目に遇う事を俺達は知る由も無かった。

八才になった。（後書き）

次なるべく早くアップ出来るように頑張ります（汗）

勝手な事を…（前書き）

誤字脱字等有りましたらご指摘よろしくお願いいたしますm（＿）m

勝手な事を…

学園長とライの話しが終わったらしく、改めてお互い自己紹介することに。

「アストレイ・ギア・マキナです。」

「ミーアル・フェルシアと申します、学園長様。」

「うむ、私はラウド・ウィズ・レイティス。この学園の学園長を任されておる。」

学園長…ラウド様と挨拶が終わるとライが

「此処じゃ何だし…学園長の部屋へ。」

とラウド様を促す。

それを見て俺とミアは首を傾げていると、それに気付いたライが

「まだまだ秘密だぜ?」

そうおどけながらも俺達を引っ張って行く。

訳が分からずなすがままの俺とミアを見るラウド様の顔は、微笑みと苦笑の間の様な表情だ。

そして、連れて来られた場所は学園長室。

ライは慣れた様子で部屋のソファーに座り、俺達も戸惑いつつ一緒のソファーへ腰掛ける。

向かいにはラウド様が腰掛けこちらを見ている。

「ライ…そろそろ訳を話してよ。」

「そうですよ！いきなり学園に連れて来た訳を話してください！」

俺がライに詰め寄るとミアも若干怒り気味にライを問い詰める。

「あ～…実は来年、此処に入学する為の試験を受ける様に言われてな。」

ライの話しによると、国王様がライにこの学園に入学するように言って来たらしい。

確かこの学園の入学可能年齢は９才から１５才までの間と決まっていたし来年なら入学出来る。

「俺は本当は嫌なんだけどしつこいから受けるに当たって条件を出した。」

「…条件？」

「ああ…アストとミアが一緒に入学試験受けるなるならオッケーて感じで…」

「「……はぁっ？！」」

ライの言葉にハモった俺とミア。

「ちょっとライっ！いきなりまた勝手なことを！」

「スマン！」

ライとミアのやり取りを俺は呆れた顔で見ている。

―あああまた面倒な事に…縁切ろうかな…―

「ちょっとアスト！聞いてるの！」

ミアに耳元で怒鳴られ我に返るとライはミアに首を絞められている所だった。

「…ゴメン。考え込んでた。てかミア、ライが落ちるから！手を放して！」

俺の指摘に慌ててミアが手を退けると咳込むライ。

「…ゲホッ。あ～死ぬかと思った…」

「…ライは一回ちゃんと説教するからね。」

咳込むライにジト目で俺は釘を刺す。

「ホッホッホッ、仲がよろしいですな。」

今まで俺達の様子を見ていたラウド様がそう声を掛けてきた。

「…とりあえずミア座って。ラウド様…ライの言ってる事なんですが。」

「ああ、その事に関しては既に国王様から手紙を頂いておる。ただ本人達の意見を聞かんと話しが出来んと思っておってな。」

俺の問いにラウド様が答えてくれる。

「では、二人の意見を聞こうかの。まずミーアル・フェルシア嬢、そなたはいかが致しますかな？」

ラウド様の問いに考え込むミア。

「……正直いきなりの事なので時間が欲しいです。父上達とも相談したいと思いますので…」

ミアの言葉に頷くラウド様。そして今度はこちらに視線を向けると

「では、アストレイ・ギア・マキナ殿そなたの意見は？」

ラウド様の問いに俺も考え込む。

少し考えた後、俺はラウド様に顔を向け

「…俺としては学園に入りたいと思ってました。ただ、それはもう少し先の予定と思っていたので、今回の話しには正直戸惑っています。」

俺の言葉にラウド様は頷きながら目で先を促す。

「今回の事はライ…ライハルト様の独断で俺達の未来を決めるような事なので、正直頭にきていますが…とりあえず両親と相談して決めたいと思っています。」

俺はライを睨みつつラウド様に意見を述べた。

「ホッホッホッ。お二人共の意見、特にアストレイ殿の意見には私も賛成ですな。」

「むぅ～…」

ラウド様の言葉に唸るライ。まあ自業自得って事で放っておく。

「ではまずお二人はご両親と相談なされ。それから後日、そうですな…一週間後に此処で、来年の試験を受けるかどうか話しを聞きますかな。」
「判りました。」
「よろしくお願いいたします。」
「……はぁ…。」

上から順に俺・ミア・ライの台詞。

落ち込むライにラウド様は
「ライハルト様。今日話した内容を纏めて国王様宛ての手紙を出しますので、ライハルト様も国王様とよく話し合ってきて頂けますかな？」
そう促すとますます落ち込むライ。

「まぁ仕方ないか…学園長よろしく頼む。それじゃ俺達は帰る。」

ライは、まだ若干落ち込んでいるものも頭を切り替えたらしくそう学園長に頭を下げ部屋を出ていく。

俺とミアも慌ててお辞儀をしてライの後を追った。

その後は、学園を出て大通りにあるカフェに寄り、ライに俺とミア二人で1時間近く説教をし家路に着いた。

家に帰り着いた時には既に夕食の時間になっていて、夕食を食べながら今日の事を両親に話してみた。

「……と言う訳なんだけど…父様と母様の意見は？」
「ん～アストちゃんが受けて見たいなら私は応援するわよ～♪」
「そうだな、アストは同年代の子達よりも賢いし大丈夫だろう。」
「そうよね♪うちのアストちゃんは貴方みたいに頭良いし～♪」
「なにを言う、賢いのはアリーシャに似ているからだよ♪」
「貴方～♪」
「アリーシャ♪」

―…何だろう、反対されると思っていたのに。
この両親は軽い感じでオッケーするとは…てか何時の間にかイチャついてるし……―

俺を横にイチャついてる両親に対して、内心頭を抱えつつこっそり溜め息をついたのだった。

勝手な事を…（後書き）

次は入学試験までいけたら良いなと思っています（^ー^；

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6546y/

魔術学園魔工科の問題児《トラブルメーカー》

2011年11月24日15時50分発行